41844
教科書文庫
4
815
41-1907
20000
67996

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

4a
815
ヨ41-D

資料室
42
815
明40

明治四十年二月十四日
文部省檢定濟
中學校、師範學校國語科用

文學博士芳賀矢一著　訂正

中等教科明治文典

巻之一

東京　合資會社　冨山房藏版

広島大学
教
67996
図書

訂正出版について

明治文典發刊以來、全國幾多の學校に教科書として採用せられたるは、余の最も光榮とする所にして、教育に經驗ある諸君が或は雜誌に、或は私信に、本書を批評し、著書の注意を促されたるは、余の最も感謝に堪へざる所なり。加ふるに昨年文部省に於て「文法許容に關する事項」を公にせられたれば、教科書としては亦之を採取して注意を喚起せざるべからず。これ茲に誤謬を訂正し、練習題の不妥當なるものを改めたる外、尚幾多の訂正を施して再版に附したる所以なり。」訂正の最も著きは第二卷にして、從來は動詞と時、法、式、相の助動詞との連結を說くにあたり、直に練習題を課して連結

の誤謬を訂正せしめたりしかども、こは同時に二箇の目的を達せんとするものにして、學習者の困難尠からざるべしと信じ、今は第五章以下第八章までは、別に練習題を課せず、第九章に於て別に連結誤謬に關する一章を置けり。第二卷は之が爲に章に於て一を增加せりと雖も、教授上の困難は却つて大に輕減せられたりと信ず。

本書の訂正とともに著者は別に「明治文典入門」を著して、國文法の根本智識たるべき要件を叙述せり。本書に先ちて之を教授すると否とは、一に教授者諸君の方寸に委せんとす。

明治三十九年九月

著者しるす

編纂の主旨

一、中等教科用の目的を以て編纂せられたる國語文典の數今や數十種の多きに及べり。この時に方りて更にこの書を出版して江湖に問はんと欲するものは、徒に屋上屋を架せんとするものにあらず。熟々現今の教授法を察して多少の遺憾なき能はざればなり。

二、文部省教授要目に於ては初三年級迄は現行文に關する文法を課すべしといへり。これ實に至當なる注意にして、上は詔勅法令より、下は新聞雜誌の論說に至るまで、明治時代には自ら明治時代の文體あり。生徒に課する作文も亦常に之を標準となさざるべからず。四年級以上に及び

ては古文の一斑をも窺はしむるを以て、この時に至りて始めて中古以上の法則をも教授すべきものたり。然るに現今行はるゝ多數の教科書には、一もこの點に注意せるものなし。故に動詞、助動詞の如き今文には全く用ゐざるものをも併せ教へ、その練習題の如きも、或は古文に採り、或は口語を主とし、現今の漢字交り文に採ること至りて稀なり。こゝを以て文法の教授と生徒の作文とは全く相懸絶せる嫌なきにあらず。本書はこの弊に鑑み、今文に用ゐざるものは、皆之を四年級以上の教授に讓り、なるべく今文に適切なる法則を授くるを主として、文例も亦、概して平易なる漢字交り文より採れり。文章法に於ても亦、今文の構造を說くを主眼とせり。これ題して明治文典と稱

する所以なり。

三、我國の文法書、總じて分析に偏して總合を忘れたり。德川時代に出でたる詞の玉緒、詞の八衢の如き、始めて國語の性質を論じたる學術上の書としては、分析をのみ主としたるも亦やむを得ざる勢なれども、中等教科の文典としては、今少しく總合的方面に著眼せざるべからず。現今行はるゝ多數の教科書はこの點にも亦毫も注意するとなく、一に古來の說明法を襲ひて、助動詞、助詞等の一語一語の意味を解釋するに過ぎず。一例を擧げんに、べしは推量をいひ、命令をいふ助動詞として說明するのみにて、その打消の助動詞と連りて、推量にはざるべしとなり、命令にはべからずとなるといふが如き事は、遂に之を說明する

ことなし。況や書かざるべからずの形をや。本書第一篇に品詞の分別を說き、第二篇に至りては品詞相互の關係を說き、現今最も普通に行はるゝ活用連語を擧げて、その連結したる各種の體形を表示せり。これ分解のみを主とせずして、總合したる形に熟せしめて、その運用を容易からしめんが爲なり。

四、口語と文語と相密接せしめて敎ふべきは、言文の一致未だ行はれざる今日に於て最も必要の事たり。文部省要目之をいひ、現行せる文法書も皆この點に注意せざるなし。然れども多くは動詞、形容詞等の一語一語の對照を主とせるのみ。連結したる上の形に於て對照するに非ざればその功用は甚だ薄き憾あり。本書は常にこれ等の注意を怠ることなく、九種の動詞の敎授法の如きも、普通の順序によらず、四段、奈行變格、良行變格を一括し、上二段、上一段を一括し、下二段、下一段を一括して敎ふることとなしが如き、口語に於ては皆已に同一語形に活用するものなればなり。

五、文法の敎授は國語の構造を知らしめ、之を正確に運用せしむるを主眼とするのみならず。又頭腦を練磨して論理的能力を發達せしむるを一目的とす。此見方よりすれば現行せる文法書はあまりに單簡にして、生徒をしてこの方面の趣味を感ぜしむること能はざるが如し。本書は第一篇品詞分別の如きに於ても、生徒の學力、時間數を斟酌して多くこの點に注意したり。

六、文部省教授要目には假名遣、字音假名遣の大要を第一に教ふべしとせり。然れどもこれ實際に於て甚だ困難なる事たり。現今漢字を交へ用ゐる文に於ては、單語の假名遣を誤る虞少くして、其誤り易きは動詞の活用等に多し。加之假名遣は文法書に屬すべきものにもあらざる故に、本書は之を第一篇の附錄とし、動詞の活用を學びたる後、之を課することとせり。

以上は本書編纂の要旨なれば、中等教科を擔當せらるゝ諸君は、偏に余が微意を諒とせられんことを請ふ。唯だ恐る余が淺學不才なる、思ふに素志の十が一をも成すこと能はざりしを。願はくは叱正の勞を吝む勿れ。

明治三十七年十月

著者しるす

卷の一教授上の注意

一、本篇に於ては品詞の分別を教ふるを主眼とし、併せて動詞、形容詞、助動詞の活用を知らしめ、最後に假名遣法の概要をあぐ。

二、體言、用言の名稱は古來用ゐ來れる所にして、國語の性質に最もよく適應せるのみならず、心理上亦この二種の概念あり、文章の構成を論ずるに當りては殊に必要なり。故に品詞の名目の外、この總稱を教ふることとせり。

三、形容詞のあり。に連りて、動詞の如く各種の助動詞の連るものを形容動詞と命名し、形容詞の一部として說けり。性質に於ては形容詞にして、活用に於ては動詞なればなり。

立派なり、詳なりの如き、從來多くは立派に詳にの副詞よりありに連るものと說けり。この相違に注意せられんことを望む。

四、口語動詞の活用は地方によりて多少の相違あり。東京語を主として注意を與へ置きたれば、便宜、地方の狀況によりて斟酌せられんことを望む。

五、從來てにをはと稱せるものを助詞と名づけたり。又助詞の中のかな、やの如きを感動詞に加ふるを一般の慣例なれども、さすればと、ど、ども、ばの如きは接續詞に收めざるべからず。故に皆之を助詞中に收めたり。品詞の區別はもと文法說明の爲めに設けたるものにして、國語の性質上かくの如き分別をなすを最も便利なりと信ずればなり。

中等教科

明治文典（訂正）卷之一目次

第一篇　品詞の分別

第一章　口語と文語と—單語……一
第二章　名詞……三
練習一……四
第三章　代名詞……五
練習二……六
第四章　數詞……七
練習三……九
練習四……一〇
第五章　形容詞……一〇

練習五……一三
第六章　動詞……一三
練習六……一五
第七章　動詞の活用……一六
其一、四段活用、良行變格活用、奈行變格活用……一七
練習七……二一
其二、上二段活用、上一段活用……二一
練習八、九……二四
其三、下二段活用、下一段活用……二五
練習十、十一、……二八
其四、左行變格活用、加行變格活用……二九
練習十二……三二

練習十三……三三
第八章　形容詞の活用附形容動詞……三四
練習十四……三七
第九章　助動詞及びその活用……三八
練習十五……四二
第十章　副詞……四三
練習十六……四六
練習十七……四六
第十一章　接續詞……四七
練習十八……四八
第十二章　感動詞……四九
第十三章　助詞……四九

第十四章　十品詞及び品詞の轉成……五一
練習十九……五四

附錄

音便及び假名遣法の概要
其一音便……一
其二假名遣法……三
練習……一〇

中等教科明治文典（訂正）卷之一目次終

中等教科

明治文典（訂正）卷之一

文學博士　芳賀矢一著

第一篇　品詞の分別

第一章　口語と文語と——單語

〔一〕

月が出る　月出づ
花が二つ三つ咲いた　花二つ三つ咲きたり
兎の耳は長い　兎の耳は長し
太郎が球を投げる　太郎球を投ぐ
ぽーとを漕がう　ぽーとを漕がん

お前の帽子は私のより　汝の帽子は余のより
小さい　小さし
樹の枝を折つてはなら　樹の枝を折るべからず
ぬ

右の如く、吾等の用ゐる國語には、口語と文語との二つあり。吾等は、これより、文語の法則を學ばんとす。

〔二〕月、花、太郎、球、兎、耳、出づ、咲く、投ぐ、を、の、ん、ず、たりの如き、一つ一つの詞を單語といふ。

單語には物の名をあらはすものあり、物の性質をあらはすものあり、物の動作をあらはすものあり。又は他の詞に附屬して用ゐらるゝものあり。其性質により、其作用により、多くの種類に分たる。吾等は先づ其分別を知らざるべからず。

第二章　名詞

〔三〕月、花、兎、ぽーと、球の如きは物の名なり。かくの如き詞を名詞といふ。

〔四〕太郎、次郎、義經、辨慶、亞細亞、富士山、臺灣、滿洲の如き、人物、場所の名は名詞なり。

〔五〕底、蓋、表、裏、の如きは、物の一部分の名にて、同じく名詞なり。

〔六〕風、雷、心、夢、春、夏、秋、冬、の如きは、形なきものゝ名にて、同じく名詞なり。

〔七〕里、町、間、尺、寸、貫、匁、圓、錢、厘の如きは、度量の名にて、同じく名詞なり。

〔八〕白、黑、赤、青、幅、丈、長さ、厚み、大きさ、熱さ、涼しさの如きは、物の色、分量、形狀、性質の名にして、同じく名詞なり。

〔九〕幸福、熱心、勉强の如きは、事柄の名にて、同じく名詞なり。

すべて事物の名稱として用ゐらるゝ語を名詞といふ。

練習一、左の文につきて名詞を指摘せよ。

（イ）日西に沒し、月東に出づ。

（ロ）犬に牙あり、牛に角あり、鷲には嘴と爪とあり。

（ハ）豐臣秀吉は尾張國愛知郡中村の人なり。

（ニ）壯年に及び獨立の生活を營むに至りて、新聞紙を發行したり。

（ホ）學を修め、業を習ひ、智能を啓發し、德器を成就す。

（ヘ）青は藍より出でて、藍よりも青し。

（ト）山々の櫻は雲か雪かと見まがふばかりなり。

（チ）心に驕なきときは人を敬ふ、心に迷なきときは人を咎めず

（リ）口は禍の門。

第三章　代名詞

〔一〇〕「汝の帽子は余のよりも小さし」の汝、余は、それぞれの姓名の代りに用ゐたる語なり。かくの如き詞を代名詞といふ。

〔一一〕私、僕、余輩、君、先生、貴君、足下、閣下の如きも、同じく姓名の代りに用ゐる語なれば、代名詞なり。

〔二二〕これ、それ、かれ、何、これら、それらの如きは物又は事をさして其名の代りに用ゐるものなれば、同じく代名詞なり。

〔二三〕こゝ、そこ、あすこ、かしこ、何處の如きは場所をさしていふ代名詞なり。

〔二四〕こち、そち、こちら、あちらの如きは方角をさしていふ代名詞なり。

すべて物の名稱の代りに用ゐる語を代名詞といふ。

練習二、左の文につきて、代名詞を指摘せよ。

（イ）己の欲せざることは人に施すこと勿れ。

（ロ）この木片は果して露將の目に入りて、その膽を奪ひぬ。

（ハ）これも一時、かれも一時。

（ニ）こゝかしこの見物に半日を費せり。

（ホ）人は二人の主に事ふること能はず、これを惡み彼を愛し、これを親み、彼を疎んずべければなり。

（ヘ）誰か烏の雌雄を知らん。

（ト）いづれの國にも皆その國のしるしの旗あり、この日の丸の旗は日本國のしるしなり。

第四章　數詞

〔二五〕「花二つ三つ咲きたり」の二つ、三つは物の數をいふ語なり。五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、十、二十、百、千、萬、億、若干、幾何、數多の如く、物の數をあらはす詞は皆數

詞なり。

〔一六〕第一、第二、第三、第四、一つ目、二つ目、三つ目、第一號、第二號、第三號の如きは、數にて事物の順序をあらはす語にて、同じく數詞なり。

〔一七〕雞一羽、長持一棹、家五軒、大砲八門、彈丸一千發の羽、棹、軒、門、發は、たゞ、數ふるために加へたる語にして、一つ、二つといふに同じ。又屏風一雙、ビール一ダースの如く、一以上の數を一纏にしてあらはす數詞もあり。

〔一八〕酒一合、鯨尺一寸、金拾五錢、午前十一時二十分の合、寸、錢、時、分、等は名詞にして、其上に數詞の添ひたるものなり。

數詞は名詞の上に添へて用ゐらるゝこと多し。

事物の數又は數の順序をあらはす語を數詞といふ。

練習三、左の文につきて數詞を指摘せよ。

(イ) 地球の表面の四分の三は海なりといへり。

(ロ) 一冊の定價十二錢五厘なり。

(ハ) 習慣は第二の天性なり。

(ニ) 一合の小豆を播けば一舛の小豆を得べし。

(ホ) 在位二十五年四十八歳にて位を皇太子に讓り給ふ。

(ヘ) 地球より太陽までの距離は一億四千八百十五萬四千キロメートルにして、太陽の容積は地球の百二十八萬倍なり。

名詞、代名詞、數詞の三つを總稱して體言といふ。

練習四、左の文より體言を摘出せよ。

(イ) 加藤清正は世に名高き賤岳七本槍の一人なり。

(ロ) 余の姉は十六歳にて、余より二つの年上なり。

(ハ) 富士山は海面を拔くこと一萬三千尺なり。

(ニ) 三種の神器は何々ぞ。

(ホ) 十二に八を乘じて六にて除せば其答幾何なるか。

(ヘ) 十一隻の軍艦は、舳艫相銜みて旅順港口に達す。

(ト) 横須賀、吳、佐世保、舞鶴は我國の軍港なり。

(チ) 琴、笛、三味線、ピアノ、オルガン、唱歌などの音樂は通例謂ふ所の音樂なり。

第五章　形容詞

〔一九〕「兎の耳長し」「汝は余より小し」「三つは二つより多し」の長し、小し、多しは、耳、汝、三つを形容せる語なり。かくの如き語を形容詞といふ。

〔二〇〕長し　短し　細し　太し　輕し　重し　高し　低しの如きは、事物の分量を形容する形容詞なり。

〔二一〕赤し　黑し　白し　青しの如く、事物の色合を形容する形容詞もあり。

〔二二〕汚し　美し　甘し　醜し　賤し　貴しの如く、事物の性質を形容する形容詞もあり。

〔二三〕「耳長し」「價の高き店」の長し、高きは、體言の下につきて形容せり。「長き耳」「高き山」といへば、體言の上につきて形容す。

（注意）「足の長き犬」といふときと「犬の長き足」といふ場合とを區別して考へよ。

體言の上又は下につきて、體言を形容するに用ゐる語を形容詞といふ。

（注意）小き猫、大なる犬の、小き、大なるはいづれも形容詞にして、小きは普通の形容詞、大なるは形容動詞に屬す。形容動詞の事は尙後に學ぶべし。

練習五、左の文中より形容詞を摘出せよ。

（イ）水清ければ、魚すまず。

（ロ）良藥は口に苦し。

（ハ）死は鴻毛よりも輕く、義は泰山よりも重し。

（ニ）父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。

（ホ）時計の短き針は時を示し、長き針は分を示す。

（ヘ）十六の三倍は六の八倍に等し。

（ト）答へて曰く「吾とても柿の甘きを知れるなり。梅の酸きをも知れるなり。だゞいかにせむ他の上、吾は拙きものなれば、生れながらに辛きなり。」

第六章　動詞

〔二四〕「月出づ」「花二つ三つ咲く」「太郎書をよむ」の出づ、咲く、よむは、動作をいひあらはしたる語なり。かくの如き語を動詞といふ。

〔二五〕握る　つかむ　拾ふ　蹴る　躓く　走るは手もしくは足の

はたらきをあらはす動詞なり。

〔三六〕見る　にらむ　食ふ　嚙む　聞く　嗅ぐ　は目、口、耳もしくは鼻のはたらきをあらはす動詞なり。

〔三七〕思ふ　慕ふ　悲しむ　苦しむ　感歎す　は心のはたらきをあらはす動詞なり。

〔三八〕浮ぶ　落つ　傾く　動く　移轉す　は物の動作をあらはす動詞なり

〔三九〕保つ　壞る　裂く　沈む　進む　斷絶す　の如き動詞は有形の物にも、無形の事柄にも用ゐらる。多くの動詞はみなしかり。

〔三〇〕「茲に人あり」「宮城は東京に在り」のありの如く存在をいひあらはす動詞もあり。

動詞は事物の動作又は存在をいひあらはす語なり。

練習六、左の文につきて動詞を指摘せよ。

（イ）爾に出でたるものは爾にかへる。

（ロ）夫婦相和し、朋友相信ず。

（ハ）幹事は會長の指揮を受けて庶務を整理す。

（ニ）蠶は絲を吐き、蜂は蜜を釀す。

（ホ）水は常に循環して寸時も休むことなし。

（ヘ）亂を治むるは猶醫の病を治むるが如し。

（ト）わが思ふ人はありやなしや。

ありは動詞にしてなしは形容詞なり。この區別を知らんには、動詞、形容詞の活用を學ばざるべからず。

第七章　動詞の活用

〔三一〕太郎は讀まず
次郎は讀みたり
三郎も讀むか
四郎は讀めども五郎は讀まず

右の例にて讀むといふ動詞の、種々に語形を變ずるを知るべし。之を動詞の活用といふ。

〔三二〕太郎は起きず
次郎は起きたり
三郎も起くるか
四郎は起くれども五郎は起きず

右の如く讀むの代りに起くといふ動詞を用ゐるときは、其活用の形、前と異なるを知るべし。かくの如く動詞の活用には種々あり。次に之を説明せん。

其一　四段活用、良行變格活用、奈行變格活用。

〔三三〕

讀　まみむめも

取　らりるれろ

右の如く、讀む、取るは、五十音の行の四段にわたりて活用す。かくの如き動詞を四段活用の動詞といふ。四段活用の動詞は頗る多し。か行に活くものを加行四段活用といひ、さ行に活くものを左行四段活用といふ如く、

その活用する行によりて、何行の四段活用といふ他の動詞も皆之に準ず。

〔二四〕「讀まず」「取らず」「食はず」「飲まず」の如く、四段活用の動詞は打消の意を示さんとて、ず（口語ナイ又はヌ）に連るときは、常にあ列の音を有す。

〔二五〕有り　は、打消を作るにも「有らず」となりて活用する形のみを見れば、ら行四段活用と全く相同じ。左の表を見よ。

取
- ら
- り
- る
- れ
- ろ

有
- ら
- り
- る
- れ
- ろ

然れども四段活用動詞の「取る」に於ては、「取り」といひては言ひ切ること出來ざるに、「有り」は「茲に人あり」の如く「あり」といひて言切ることを得。唯この點を異なりとす。

有りを良行變格活用の動詞といふ。

〔二六〕「死ぬ」は「死なず」と、あ列の音より打消のずに連ることと四段活用に同じ。但し、「死ぬる人」「死ぬれば」と活くことありて、活用の形、四段活用よりも尚二つ多し。左の表を見よ。

死な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　ね

死 ― なに ぬ ね の
　　 ― る れ

死ぬを奈行變格活用の動詞といふ。

（注意）（一）四段活用の動詞は、文語と口語とその活用全く相同じ。良行變格、奈行變格の動詞は、口語に於ては四段活用と同じくなれり。

（二）奈行變格、良行變格の動詞は、現今最も普通に用ゐるもの、右に掲げたる二語のみなれば、之を記憶して、其他の語にて「あ」列の音より打消となるものは、すべて四段活用の動詞と知るべし。

（三）居りも良行變格の動詞なれども、今は四段活用の如く用ゐる。

練習七、左の動詞の活用を示せ。

書く　保つ　打つ　滅す（ホロボス）　起す（オコ）　言ふ

願ふ　編む　賣る

其二　上二段活用、上一段活用

〔三七〕猿木より落ちたり

猿木より落つ。

猿も木より落つることあり

猿木より落つれば……

たちつてと　落
るれ

右の如く「い」「う」の二列に活用し、更にその「う」列の音に「る」「れ」の添ひて活用する動詞あり。五十音の行の中にて上の二段に活用するを以て、上二段活用といふ。

〔三八〕落ちず　強ひず　悔いず

右の如く、上二段活用は打消の意を示すとき、常に「い」列の活用の形より連るものなり。

〔三九〕射る、鑄る、著る、煮る、似る、干る、見る、惟みる、鑑みる、居る、用ゐる、率ゐるの十二語も亦、打消を示すとき、射ず、煮ず、用ゐず　などとなりて、上二段活用と同じくずの上に「い」列の音を有するものなり。これ等は「い」列の音のみにて、「う」列に活用することなし。其活用左の如し。

射　やいゆえよ　るれ
煮　にいぬねの　るれ

故に之を上一段活用の動詞といふ。

（注意）（一）上二段活用は口語に於ては或地方を除きては全く上一段活用と同じくなれり。

（二）上一段活用の動詞にて普通に用ゐるものは、上

に擧げたるものゝみ。故に右の十二語を記憶し、其外の語にて「い」列の音より打消となるものは、すべて上二段活用の語と知るべし。

(三)地方によりて「い」列の音と「え」列の音とを混同する所あり。注意すべし。

練習八、左の動詞の活用を示せ。

見る　生く　報ゆ　強ふ　吸ふ　入る

射る　煑る　著る　斬る　起く　置く

練習九、左の文より動詞を摘出して、その活用の種類を話せ。

(イ)老を敬ひ、幼をいつくしみ、有德を貴び、無能をあはれむ。

(ロ)忠言は耳にさかひ、良藥は口に苦し。

(ハ)過ぎたるはなほ及ばざるが如し。

(ニ)昔は東海道を行くに十二三日を費したり。

(ホ)彈丸雨の如く飛び來れども、平然として各自の職務に從ふ、

(ヘ)人生五十功なきを耻づ。

(ト)この式濟みて後は唯釣床をつりて眠に就くのみ。

(チ)少年老い易く、學成り難し。

(リ)外交の危機は已に去りて、一電遙に露都の公使館に飛べり。

其三　下二段活用、下一段活用

(四)人を譽めず

人を譽む。

人を譽むることあり
人を譽むれば……

右の例を見よ。上二段活用の動詞と其活用よく似たるに非ずや。

たゞ其第一の變化は「い」列の音を有せずして「え」列の音を有せり。之を表に示せば、

譽
まみむめも
るれ

かく「え」「う」の二列に活用して、更にその「う」列に「る」「れ」の添ひて活用するものを、下二段活用といふ。

〔四〕痩せず　受けず　止めず　變へず

右の如く下二段活用の動詞は、打消に連るときは、常に「え」列の音を有すと知るべし。

〔四〕蹴るの一語はくと活くことなし。「け」、「ける」、「けれ」と三樣の活用形を有するのみ。

故に之を下一段活用の動詞といふ。

蹴
かきくけこ
るれ

（注意）(一)下一段の動詞は蹴るの一語のみ。
(二)下二段活用の動詞は口語に於ては或地方を除

きては下一段の活用と同じくなれり。

練習十、左の動詞を活用せよ。

枯る　刈る　乗ぬ　死ぬ　痩す　受く
浮く　消ゆ　越ゆ　諫む　納む　尋ぬ
恐る　始む　始る　流る　流す　分く
分つ

練習十一、左の文の動詞を摘出して、その活用を示せ。

(イ) 農作物は皆枯れ果てゝ一年の收穫零となれり。
(ロ) 天は自ら助くるものを助く。
(ハ) 秋高く馬肥えたり。

(ニ) 己を責めて人を責めざれば恐なし。
(ホ) 敵將を仆さんと思ふものは、先づその馬を射る。
(ヘ) 心こゝに在らざれば聽けども聞えず、視れども見えず、食へども其味を知らず。
(ト) 往くものは追はず、來るものは拒まず。
(チ) 鶯は幽谷を出でて喬木に遷る。
(リ) 學年は毎年四月に始りて、翌年の三月に終る。

其四　左行變格活用、加行變格活用

(四三)

勉強せず
勉強したり
勉強す
勉強する時……

勉強すれば……

勉強 ― さ し す せ そ
　　 ― る れ

右の例を見よ。下二段活用と其活用甚相似たり。打消の場合に「え」列の音を有するも亦相同じ。但し「勉強したり」とし に活くこと下二段には無し。下二段は活用の形四つなるに、これは五つの活用形を有せり。故に之を左行變格の動詞といふ。

〔四四〕左行變格の動詞は、す（爲）の一語のみなり。然れども「罪す」の如く名詞より動詞を作るは多くはこの活用によ

る。又「勉強す」「スタデーす」の如く漢語外國語を國語の動詞に轉用するときは亦この活用によるを以て、今日にては、甚だ必要なる動詞なりと知るべし。

〔四五〕歎ず　論ず　變ず　討ず　講ず

右の如く漢語の撥ぬる音、又は長く引く音の下には大抵「ざ」行の活用となる。但し、その漢語二字以上になれば、感歎す、議論す、輪講す、の如く、やはり清音を用ゐるものとす。

〔四六〕「詳にす」「明にす」「辱くす」「德とす」の如く他の詞よりこの活用を造ること亦多し。

〔四七〕「來」の一語は打消をいふ場合にはこず となりて「お」列の音を有す。これは左の如く活用す。

かきくけこ　来
るれ

来を加行變格活用の動詞といふ。

練習十二、左の動詞の活用を示せ。

出發す　運動す　信ず　歎息す

以上學び得たる所によりて、動詞は其活用によりて、左の九種に分るゝことを知る。

動詞
- 四段活用
- 上二段活用
- 下二段活用
- 上一段活用(十二語)
- 下一段活用(一語)
- 左行變格活用(漢語及他の詞より來るものを除けば一語)
- 加行變格活用(一語)
- 奈行變格活用(一語)
- 良行變格活用(一語)

(注意)上一段以下の動詞は、其數甚少ければ、之を記憶しおくべし。

練習十三、左の文句につきて動詞の活用を區別せよ。

(イ)千里の馬も老いては駑馬に劣る。

(ロ)衆多く其議に應ず。右大臣岩倉具視獨り之を不可とす。

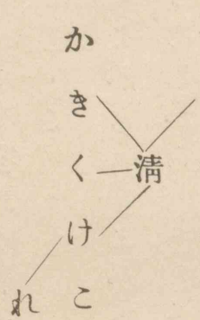
(八) 此日曩に沈沒せる福井丸の船首に當りて、頭部に砲彈の大傷を被り、袖に金線を縫へる軍服を着し、望遠鏡を懸け短劍を佩びたる日本海軍將校の死體を發見せり。

(二) 近來に至り古物を研究する學問大に進歩したり。之によりて研究するときは、よく古代人民の有樣を知ることを得。

第八章　形容詞の活用 附形容動詞

〔四八〕 水清く流る。
川の水清し。
清き水に嗽ぐ。
水清ければ魚すまず。

形容詞にも亦活用あること、これにて明なり。其活用は動詞の如く、五十音の一行に止まらずして、か行とさ行との兩行に跨れり。



〔四九〕 形容詞には右の如く、く(1)、し(2)、き(3)、け(4)れと四樣に活用する一種あるのみ。但しく(1)、き(3)、け(4)れと活用するとき、其上に「し」の音ありてしく、しき、しけれとなるものは(2)の時にしを重ねざるものとす。

悪　悪　悪　悪
し　し　し　し
く　○　き　け
(1)　(2)　(3)　(4)れ

(注意)　口語にては(2)(3)の活用いとなれり。

〔五〇〕　すべて形容詞は第一段の「く」の活用形より動詞のありに連りて

(善)　よから　よかり　よかる　よかれ

(悪)　あしから　あしかり　あしかる　あしかれ

と活用す。かく活用せる形容詞を形容動詞といふ。

〔五一〕「詳に」「明に」「立派に」「慨然と」「滔々と」などはに、とよりありに連りて「詳なり」「明なり」「立派なり」「慨然たり」「滔々たり」の如く、形容動詞をなす。

(注意)　(一)形容動詞の活用は良行變格に同じ。

(二)體言の上又は下につくを普通の形容詞に同じ。

(三)「富士山なり」「我志なり」などの如く名詞よりなりに續く場合と混同すべからず。

練習十四、左の文より形容動詞を摘出し、その語のいづれの語を形容するかを話せ。

(イ)　物盛なれば必ず衰ふ。

(ロ)　池中の魚は河海の大なるを知らず。

(ハ)　四面皆山にして通路の不便少からず。

(ニ)　この圖は精密なれども、正確なりといふを得ず。

（ホ）眞に勇猛なる士に非ずや。

（ヘ）福運は常に勤勉なる人の側に傍ふこと、恰も順風穩波の航海に巧なるものに隨ふが如し。

形容詞（形容動詞を含む）動詞を總稱して用言といふ。

第九章　助動詞及びその活用

〔五二〕太郎は書を讀まず。
次郎は書を讀みたり。
右のず、たりは動詞の下に付きて、動詞の作用を助くる語なり。かくの如き語を助動詞といふ。

〔五三〕助動詞は其意義によりて種々に分る。今最も普通に用ゐるものを左に示さん。

(1)「行かず」「行かざるなり」の「ず」「ざる」は、打消を示す助動詞なり。

(2)「打たる」「捨てらる」の「る」「らる」は、受身の助動詞なり。

(3)「打たす」「捨てさす」「打たしむ」の「す」「さす」「しむ」は使役の助動詞なり。

(4)「行きたり」「行けり」「行きき」「行かん」の「たり」「り」「き」「ん」は時の助動詞なり。

(5)「行くべし」の「べし」「行くまじ」の「まじ」は推量の助動詞なり。べしは命令、能力をいふことあり。このべしよりありに續きたるものにべかりといふ助動詞あり。

(6)「行くなり」「花なり」「將軍たり」の「なり」「たり」は指定の助

動詞なり。

(7)「行く如し」「花の如し」の「如し」は比較の助動詞なり。

〔五四〕右の中(6)のなりは體言にも形容詞にもつき、(6)のたりは體言にのみつく。(7)の如しは動詞及びの、がの助詞の下につく。其他はすべて動詞及び形容動詞、又他の助動詞の下につくものなり。

助動詞は一二の取除の外、動詞、形容動詞又は他の助動詞の下に付きて動詞の作用を助くる語なり。

助動詞にも活用あり。

〔五五〕る、らる、す、さす、しむの五つは其活用下二段活用の動詞に同じ。

(一)れ　るる　るれ
(二)らる　らるる　らるれ
(三)せ　する　すれ
(四)させ　さする　さすれ
(五)しめ　しむる　しむれ

〔五六〕なり、たり、り、べかりの活用は良行變格活用に同じ。

(一)なら　なる　なれ
(二)たら　たる　たれ
(三)ら　る　れ
(四)べから　べかる　べかれ

〔五七〕べし、まじの活用は形容詞の活用に同じ。如しも大抵相同じ。

(一) べく　べし　べき　べけれ
(二) まじく　まじ　まじき　まじけれ
(三) 如く　如し　如き

〔五八〕んはん、めの二樣に變化す。

ん　め

〔五九〕き、ずは左の如く活用す。

(一) せ　き　し　しか
(二) ず　ぬ　ね

(注意) 右の活用表の中□印あるものは古文にのみ用ゐるものなり。

練習十五、左の文より助動詞を摘出せよ。

(イ) 學は疑ふにあらざれば明ならず。
(ロ) かくの如くば書を讀むとも何の益あらん。
(ハ) 道の爲には重き身なり。私情の爲に命を棄つべからず。
(ニ) はつ茸、松茸など木の根、落葉の下に求むべし。
(ホ) 面あたり砲煙彈雨の大活劇を目擊する思あらしむ。
(ヘ) 奈良は元明天皇以後七代七十餘年間の帝都たり。

第十章　副詞

〔六〇〕人口最も多し　甚だ狹き路
正に其業を卒へたり　よく飲み、よく食ふ
遙に富士山を望む
右の例にて最も、遙に、甚だ、正に、よくは、それぞれの動詞、

形容詞に副ひて、其意味を限定するに用ゐらる。かくの如き語を副詞といふ。

〔六一〕副詞には今、しばし、嘗て、既に、現に、遂に、久々の如く、時間の意味をあらはすものあり。

〔六二〕茲に、何處にの如く場所の意味をあらはす副詞もあり。

〔六三〕纔に、半、殆ど、甚だ、全くの如く、分量度合をあらはす副詞もあり。

〔六四〕必、豈、亦、慥に、いづくんぞ、恐らくは、願はくは の如く、斷定、推量、願望等の意味をあらはす副詞もあり。

〔六五〕帽子を輕く打つ

右の如く、形容詞はくの形より副詞となること多し。突然に行く　自然と育つ　の如く、すべて形容動詞になる形よりも、副詞として用ゐらる。形容詞を副詞と區別せんには體言を形容するか、用言を形容するかに注意すべし。

〔六六〕「極めて大なり」「決して聞かず」の如きは動詞より副詞となりたるものなり。

〔六七〕いと靜にゆく。甚だ熱心に

右の例の　いと、甚だ、は、靜に、熱心に　の副詞を更に限定せるものなり。故に副詞は形容詞、動詞のみならず、又他の副詞を限定することありと知るべし。

副詞は、用言（動詞、形容詞）又は副詞に副ひて、其意味を限定する詞なり。

練習十六、左の文より副詞を摘出せよ。又そのいづれの語を限定するかを話せ。

(イ) 山光水色また自ら一種の風致あり。
(ロ) 互に善を責むるは朋友の道なり。
(ハ) 弓馬の技皆蘊奥を極む。
(ニ) 遙に三保の松原を望み、漸くにして靜岡に着す。
(ホ) 王何ぞ必ずしも利をいはん、唯仁義あるのみ。
(ヘ) 曾て之を憂へしに、今果して然り。

練習十七、左の文の空所に、適當なる副詞を補へ。

(イ) 圍を受くること八月城○○陷る。
(ロ) 一たび決心したることは○○成し遂ぐべし。
(ハ) 港と稱する處には○○波止場の設あらざるなし。
(ニ) 鐵道を架設したれば兩地の往復○○便利なり。
(ホ) 理學を研究して○○其名を著す。
(ヘ) これより後外國船艦の往復するもの○○多し。
(ト) 恩賜の御衣今○○在り。

第十一章　接續詞

〔六八〕月又花
毛筆或は鉛筆にて認むべし
長くして且廣し
又、或は、且等は、語句を結付くる詞なり。かくの如き語を接續詞といふ。

〔六九〕「御話申上度候間」「久しく留學中の處」。「之を知らずと雖も」などの間、處、雖の如く、句に附屬して取離し難き接續詞あり。

〔七〇〕「秦か漢かはた近代か」「月又花」のはた、又の如き、其他並に、而して、然るに、然れども などは、文の中より取除きても文意に格別の差異を生ぜざる接續詞なり。

練習十八、左の文中より接續詞を摘出せよ。

（イ）物窮して又通ず。

（ロ）濠太利亞の天產物中動物及び植物は奇異なる種類に富むと雖も、經濟上有用なるもの極めて少し。

（ハ）賴山陽名は襄、字は子成、山陽と號す。又三十六峯外史の別號あり。

（二）詩文を以て名あり、然れども其心を用ゐたるは經濟の學なり。

第十二章　感動詞

〔七一〕あな恐しや
あはれ一生の思出に……
嗚呼悲しいかな

の あな、あはれ、嗚呼 の如きは感動したるときに不意に言ひあらはす詞なり。かくの如き語を感動詞といふ。

第十三章　助詞

〔七二〕樹の枝　わが心　球を投ぐ　人に與ふ　三つより多し　西へ行く

右の例にての、が、を、に、より、へは、それぞれの語の下に付きて他の語との關係を示せり。かくの如き語を助詞といふ。

〔七三〕書を讀めども　書を讀めば　書を讀むとも

右のども、ば、とものの如きは、用言の下につくのみにて體言の下につくことなし。

〔七四〕助詞には種類多し。

(イ)「人か鬼か」「誰かある」「いふかいはぬか」「人や先われや先」「ありやなしや」の「か」「や」の如き疑問の助詞もあり。

(ロ)「豈圖らんや」「誰か之を信ぜんや」の「や」、「面白き月かな」「月を見るかな」の「かな」の如き感動の助詞もあり。

(ハ)「月と花と」「見ると聞くとは大なる相違なり」「四郎は讀めども五郎は讀まず」の如き接續の助詞もあり。

尚其外にも種々あり。

(注意)助詞は形の上より別ちたる品詞の名にて、功用よりいへば、接續詞、感動詞と同じきものをも含めりと知るべし。

助詞は種々の品詞の下につきて他の品詞との關係を示し又は其作用を助くる詞なり。

第十四章　十品詞及び品詞の轉成

〔七五〕以上學びたる所によりて、國語には名詞、代名詞、數詞、

形容詞、動詞、助動詞、副詞、接續詞、感動詞、助詞の十種類あることを知れり。其中助詞、助動詞の二つは必ず他の詞の下に附屬して用ゐらるゝものにして單獨にては其意義をなさぬものなること、又動詞、形容詞、助動詞の三つは活用する語にして其他は活用せざる語なること、語尾の活用する語と活用せざる語とあるを知り、尙體言用言の名稱をも學びたり。

〔十六〕名詞以下十種の詞を品詞といふ。即國語には十品詞の區別あり。かく品詞に分てるは、文法の說明上便利の爲なれば、その間に相互の關係あることを忘るべからず。例へば、

(1) 光、霞、帶、笑、思等は動詞の名詞となれるものなり。

(2) 僕、君、老兄の如きは名詞の代名詞となれるものなり、

(3) 大人ぶる、蟲ばむ、嵩むの如きは、名詞より動詞となれるものなり。

(4) 全くす、辱くす、重くす、半ばす　の如きは形容詞或は數詞より動詞となれるものなり。

(5) 誠に、常に、こゝに、決して、以て、永くの如きは名詞、代名詞、動詞若くは形容詞より副詞となれるものゝ例なり。

(6) あはれの如きは名詞にして感動詞なり。

(7) 扨、また　の如きは副詞となるときもあり。接續詞となるときもあり。

練習十九、左の文につきて各語の品詞を辨別せよ。

(イ) 人生れて二十より三十に至るまでは、方に出づる日の如し。四十より六十に至るまでは日中の日の如し。盛德大業この時期にあり。

(ロ) 清麿還りて奏して曰く、我國開闢よりこの方、君臣の分自ら定まれり、天日嗣は必ず皇統を立つべし。敢て非望を抱くものは速に誅戮を加ふべしと。

(ハ) 父母や、我を生み我を養ひ我を長せしめ、我を教ふ。これ無上の厚恩、何の日にか之を忘れん。

中等教科 **明治文典** 訂正卷之一終

附錄

音便及び假名遣法の概要

其一、音便

〔一〕

(1) 飛びて　飛んで
讀みて　讀んで
死にて　死んで

(2) 勝ちて　勝つて
取りて　取つて
食ひて　食つて

(3) 問ひて　問うて

(4) 書きて　書いて

指して　　指いて

動詞のて(又はたり)につゞくときは(1)の如くび、み、にはんと撥ぬる音に轉じ(2)の如くち、り、ひは促る音に轉じ、(3)の如くひは長音に轉じ(4)の如くき、しは母音のいに轉ず。これ等はみな發音の便より生ずるものにて、これを動詞の音便といふ。

〔二〕悲しきかな　　悲しいかな

之を久しくす　　之を久しうす

右の如く形容詞の活用のき、くも亦音便にていうとなることあり。

〔三〕朔　　つきたち　　ついたち

商人　　あきびと　　あきうど

手水　　てみづ　　てうづ

右の如く名詞にも音便にていうとなるものあり。音便は發音の轉じたるにつれて假名をもかきかふること、の認められたるものなり。

其二、假名遣法

〔四〕燈消えたり　　草を植ゑたり　　困難に堪へよ

え、ゑ、への三つの假名は同樣に發音すれども假名は別々に書き別けざるべからず。これ等は昔の發音已に變じながら、假名を書きかふることは未だ許されざるものなり。かくの如く同音の語を書きわくるを假名遣法といふ。

(いの音)　過を悔いよ　　兵を率ゐて進む　　學校に通ひたり

(うの音)　松の木を植う。　　餅を食ふ。

（えの音）　國榮える　民飢ゑたり　字を習へ

右の如き假名遣はよく動詞の活用を記憶すれば、誤ることなし。即ち何活用の動詞にて何行に活用すといふことを知れば、其假名明瞭になるなり。例へば悔ゆは打消に悔いずとなれば、上二段なりと知り、悔い、悔ゆとや行に活くと知らば悔いといの假名を書くべく、悔ひ、悔るなど書くことの誤なるを知るべし。すべて動詞の活用は、一行の中にのみ活用するものなれば、一つの活用の假名を知れば、其他は之より類推することを得べし。例へば通ひたりとひに活用することを知らば通は、ひ、ふ、へと書くべしと知るが如し。

〔五〕　笑うて答へず
　　天を仰いで歎ず

來駕を辱うす

右はすべて音便の場合なり。笑ふは行の動詞なれども、て（又はたり）の上にあるときは、音便にてうとなること故、うと書くべく、笑ふてと書くは誤なり。

〔六〕　その行に耻ぢよ　山に攀づ
　　感じたり　信ずべからず

動詞の活用の假名は下二段の混ず及び漢語より來る左行變格の外は、すべてぢ、づなりと知るべし。

〔七〕　規則を變ふ　風俗變はる
　　十三に二を加ふ　寒氣日に加はる
　　賞典を群臣に賜ふ　賞典を賜はる
　　主意合ふ　時計を合はす

變ふ、加ふ、賜ふ、合ふの動詞には行に活用するものと知らば、之より出てたる「變はる」、「加はる」、「賜はる」、「合はす」の動詞は右の如く語尾の上にはの假名を書くべきことを知るべし。

〔八〕病を愈やす　病愈えたり
田を肥やす　田肥えたり
錢を費やす　錢多く費えたり

右の如くやずとなる動詞は其本の動詞はや行の活用なりと知るべし。

〔九〕願　ねがひ　煩　わづらひ　占　うらなひ
謠　うたひ　戰　たたかひ
老　おい　悔　くい　報　むくい

榮　さかえ　費　つひえ
耻　はぢ

右の如き名詞の假名も、已に動詞の活用を知れば誤ることなし。

〔一〇〕鏃　やじり(矢、尻)　眦　まなじり(目の後)
諺　ことわざ(言、業)　所行　しわざ(仕、業)
基　もとゐ(本、居)　鳥居　とりゐ
祖父　おほぢ(大、父)　伯、叔父　をぢ(小、父)
弦　ゆみづる(弓、弦)　鍋弦　なべづる

右の如き複合語の假名遣は、之を組立つる本の語にわけて考ふれば、會得せらるゝこと多し。

〔一一〕上　うへ　上塗　うはぬり

右の如く、複合語となるとき、音韻の變る場合にも、本の行の中にて轉ずることを注意せよ。

〔二三〕 耻(名詞)　耻づ(動詞)　耻づかし(形容詞)
男(名詞)　をゝし(形容詞)

右の如く、一つの品詞の假名遣を知れば、關係せる他の品詞の假名遣は、自ら知ることを得べし。

〔二四〕 鱸　ずゞき　硯　ずゞり　雀　ずゞめ
皷　づゞみ　葛籠　づゞら　綴　づゞれ
續く　づゞく

右の如く、重りたる音は同字の濁音なりと知るべし。

國語の假名遣にて注意すべき事は大凡左の如し。其外は一々の字に就いて之を覺ゆる外に方法なし。

〔二四〕 字音の假名はおーの長音にあう、おう、あふ、おふなど書き方ありて、一々之を記憶せんこと、もとより困難なり。近頃文部省令の小學校施行規則にては之を「おー」と長音符にて書くことに一定せり。古來の字音假名遣について注意すべきことは左の數項なり。

水　唯　對　愛　兄　明

右の如く、う列の音を有する漢字の下にあるいの音はすべてゐを書く定にて、又あ列え列の下にあるいの音はいの假名にて書く定なり。

〔二五〕 生　平　丁　明

右の如くよー、えーの二音を含める漢字はよーの音に發音するときはやうの假名を書く定なり。

〔一六〕せう　肖　宵　霄　消　銷　逍　稍　梢
しよう　鍾　揷　衝

右の如く漢字のかたちに注意して見れば、同樣のかたちを有する字は大抵同樣の假名にて書くべきことを知る。

〔一七〕攝合併　甲冑　急度　雜誌　拾把

右の如く或時はつの音となるもの、又他の字と重りて促音をなすものは、長音のときはふの假名にて書くものなり。

以上の諸注意の外は一々字に就いて覺ゆる外なし。

練習　假名遣の誤を正せ

(イ)父母は我を生み我を養う　(ロ)勳章を賜わる　(ハ)恩を受けては必ず報ひよ　(ニ)老ひては子に從ふ　(ホ)戸を閉じよ　(ヘ)その行感づるに堪えたり　(ト)賞を辱ふす　(チ)視れども見へず　(リ)食えどもその味を知らず　(ヌ)天勾踐を空しふする勿れ　(ル)知らざることは人に問うべし　(ヲ)砲聲十里の外まで聞へたり　(ワ)君を思ふて眠らず　(カ)昨日某君を訪ふたり　(ヨ)學力衆に抽んず　(タ)雪未だ消へず　(レ)寒氣日に加わる　(ソ)嗚呼悲しひかな　(ツ)城遂におちゐる　(ネ)產物年々殖えたり　(ナ)敎師のをしえに背くな　(ラ)祝え祝え今日の佳節　(ム)心配に堪えず　(ウ)風絕へず吹く　(井)國のさかへ(榮)　(ノ)つずまやか(約)にす　(オ)ちりじりに(散々に)なる　(ク)大ひに敵を破る　(ヤ)君と僕とはおなひ年　(マ)ちじみ(縮)　(ケ)すづし(涼)　(フ)しぢみ(蜆)　(コ)はうりつ(法律)　(エ)こんりう(建立)　(テ)のうふ(納付)　(ア)いしずえ(礎)　(サ)うえき(植木)

明治三十七年十二月十八日發行
明治三十八年二月廿一日印刷
明治三十八年二月廿四日發行
明治三十九年十一月十五日再版印刷
明治三十九年十一月十五日再版發行
明治四十三年十二月十七日訂正再版印刷
明治四十三年十二月十七日訂正再版發行

著作權所有

（不許漢譯）

著作者　芳賀矢一

發行兼印刷者　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　冨山房

同所　合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬

代表者　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地　新井電新堂

印刷所　東京市神田區南乘物町十九番地

販賣所　明治圖書株式會社（長電話本局八九二番）

明治中等教科典文（正訂）

卷之一　正價金貳拾三錢
卷之二　正價金貳拾三錢
卷之三　正價金貳拾三錢